

「未だ悪夢」(1995年3月号掲載・久保 政秀)

成人式の振替え連休も終わり新年もようやく第3週目の朝を迎えようとしていた。

管制室も当日3時過ぎに発生した炎上火災も終息し、通勤時間帯に決まって入る交通事故の着信にはまだ早い静かな時刻が過ぎていた。

魔の時刻、ドドッと地響き、何事かと思う間もなく室内が、指令台が何故か一定方向(南北)へ徐々に大きく波打つようにきしみ音を立てながら揺れだした。

いつまでもまるで揺りかごのように揺れ動く指令台に中腰になってつかまりながら一体誰が、何者が悪い冗談をやっているのかと思ったのが事実であった。

長年災害に対峙しながら大地震が、しかもこの神戸に起ころうなどと頭の片隅にでもあっただろうか。

直後119、指令、専用等殆どの回線が着信状態となり、障害に伴う警報音、庁内サイレンの音で騒然となり、しばらく応答不能状態に陥っていた。

程なく応答可能となった119番、署々独自で覚知し現場に飛び出した各隊の無線に否応なく事の重大さを知れば知る程、部隊の運用等一体何をどうするべきかと。

壊滅した街、焼け野原と化した家々、現場の隊員の心労を想う時、もっと何か成し得なかったかと複雑な胸の中で、未だ悪夢と願わずには居られない。